

神様の名から洪水予知まで多くの「善し」と
雑草の「悪し」の両面を備えるヨシ

森田 弘彦

新型コロナウイルス感染症のために3年間中断していた対面での日本雑草学会の大会・講演会が、2023年3月に滋賀県の龍谷大学農学部で開催された。多くの雑草研究者と久しぶりにお会いし、雑談を含めて様々な情報を直接いただくことの有難さを改めて実感した。琵琶湖を抱える滋賀県での開催とあって、この大会では「ヨシ群落と人の共生」をテーマに、地元滋賀県と岡山県でのヨシ (*Phragmites australis* Trin. ex Steud. 図-1) と人の係わりや保全に関する特別講演が持たれた。

アシとヨシの呼称には以下の説明がある(牧野富太郎「牧野日本植物圖鑑」, 1940)。

和名あしハ蓋シ稈ノ變化セシモノナラント謂ヘリ はしハ稈ヲ指ス。よしハ元來本來ノ名稱ニ非ズあしヲ惡シト附會シ之レニ對シ綠起上之ヲ善シト爲セシニ外ナラズ。

「アシ」としては、8世紀初頭に成立した「古事記」の冒頭に「天地初發之時・・・次國稚如浮脂而 久羅下那洲多陀用幣疏之時 如葦牙因萌騰之物 成神名」として4番目の神様「宇麻志阿斯訶備比古遲神(古事記原文 雄山閣,

1936)」が登場して以来、日本人との係わりが続いてきた。日本の古い文献に登場する植物を研究した松田修氏は、アシが古事記に取り上げられた事情を以下のように説いた(記紀の植物, 植物と文化創刊号, 1971)。

あし(葦) イネ科

「記紀」の開巻最初に見えるのは、葦^{あしかび}牙の名である。アシカビはアシの芽をいい、「記紀」には若葦、葦船、葦原^{なかつくに}中国、豊葦原水穗国、葦原色許男神、葦那陀迦神、可美葦牙彦舅尊などという名がみえるから、上代はこの国にアシの類がたくさん生えていたことがわかるし、これはまた古代人の生活とも密接な関係があったことが考えられる。すなわち、水田の耕作にはアシの生えているような水湿地が必要であつたらうし、この若芽はたべられるし、茎葉は屋根材、茎はスダレと、生活にも関係の深い草だからである。

古代、ヨシ原からヨシの根茎を除去して水田にするのは労力のいる大変な作業であつたと思うが、日本人の生活に深くかかわった植物に違いないので、雑草学会の特別講演のテーマとなるのも無理はない。当日の演者の講演スライドにも登場した『西川嘉廣「ヨシの文化史 一水辺から見た近江の暮らし」

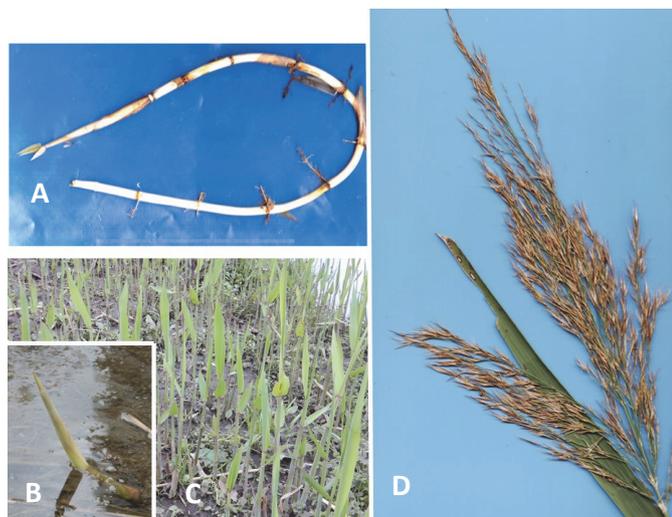


図-1 ヨシ (*Phragmites australis*) の各部位
A: 地下の根茎とその先端の萌芽(秋田県秋田市, 2014年),
B: 萌芽時、「葦牙」の状態,
C: 萌芽直後の若葦(千葉県流山市, 2023年),
D: 穂(秋田市, 2013年)



図-2 ヨシの「善し」の側面を多数収録した「西川嘉廣 ヨシの文化史, 2002」の表紙

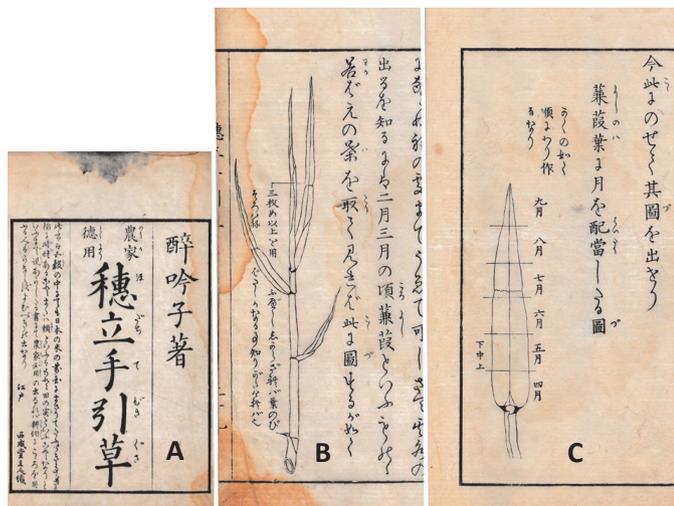


図-3 イネなどの穀類や農事の解説書「酔吟子 穂立手引草, 1828」に所収されたヨシの葉身の“くびれ”を使った洪水予知の方法 (A:扉, B:若ばえの3枚目以上の葉, C:“くびれ”の位置を月と上・中・下旬に配当)



図-4 「穂立手引草」の記述(図-3)から、千葉県八千代市産ヨシの葉身の“くびれ(矢印)”で試みた洪水時期の推定(2022年4月)

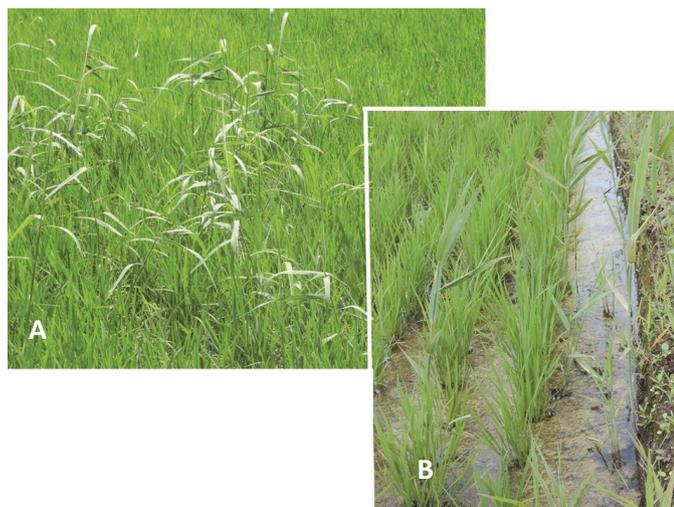


図-5 「水田の内部や畦畔沿いに生育する多年生雑草のヨシ (A:秋田県北秋田市, 2014年, B:千葉県柏市, 2022年)



図-6 アスファルトを突き破るヨシの萌芽(流山市, 2019年)

暮らし一, 2002 図-2』では「第二章 ヨシのさまざまな用途」として、「食料 生薬原料 肥料 燃料 ヨシ紙 葦の尖筆 葦ペン 葦笛 リード楽器 ストロー 葦粽 リードクロス・葦つづれ・葦ボード 漁具 葦簀 葦戸 葦棚 垣根 葦葺屋根 葦舟」が挙げられた。

変わった用途として、江戸時代後期の文政年間には、ヨシの葉で出水・洪水の程度と時期を予知する方法があった。文政11(1828)年に江戸の酔吟子が著したイネなどの穀類や農事の解説書「穂立手引草」に以下のようにある(図-3)。

○第十 兼葭の葉にて出水を知る事

・・さて其水の出るを知るには二月三月の頃に兼葭といふもの
若ばえの葉を取りて見れば此に圖するが如く葉にくせありて節阿る

ものなり 此節一ツあらば出水一度なり もし二ツあらハ二度三ツあらば三度水出ると志るべし 水の多き寡きは古の節はつきりとあらば一桠いづると志るべし もしかすかににあらば出水すくなく五合七合そ禮ハ節のありやうを觀て定む邊きなり 月を志るには^{よしのは}芦葉を中央より二ツに折りて二枚となし そ禮を二枚のままにて又三ツに折りて開き見ればわりめ六段に付なり さてこ禮を月に配當するに正月より三月までハ^{しほつてい}出水の節に阿らず 十月より十二月までも亦水のいづる時に阿らざ禮ば春の三ヶ月と冬の三ヶ月とをバ捨て葉の中の折目に入れず 四月より九月までの六ヶ月を割付る事にして葉の本の方の一団を四月二段を五月と段々に九月まで順に配當して其月に當りたるころの節にて某月出水といふ事を知る 又その一ヶ月の中を上中下と十日づつ三ツに割りて見れば上旬の出水か下旬の出水かといふ古登を明白に分留古登にして・・(後略)

ここでの「葉にくせありて節ある」は、星川清親先生がイネで次のように解説された現象である（「図説イネの生長」、1975）。

葉身の先端から数 cm 基部寄りの部分は、少しくびれたようになっていて、ここでは葉脈も直線的でなく若干屈曲している。これは若い葉が発達するさい一つ下位の葉の葉身と葉鞘の境でしめつけられて生ずるものと考えられていて、イネに限らずムギ類その他イネ科の葉身に共通に認められる特性である。

つまり酔吟子氏によれば、「ヨシの若茎の3枚目以上の葉身を探って“くびれ”を観察する。“くびれ”が1ヵ所なら出水は1回，“くびれ”の程度が強いと激甚、さらに葉身を6等分して、基部から4～9月にあて、それぞれを3分して上・中・下旬とし，“くびれ”の位置で出水の時期を予知する。」ことになる。2022年春に千葉県北西部の川岸で7本の若茎の葉で“くびれ”の位置を測定したところ、出水の予測時期は「6月中旬から7月下旬（旧暦）」まで分散した（図-4）。「この方法は当たる」とは言い難いようである。

この植物の「悪し：アシ」の側面はやはり雑草となる場合で、「原色 雑草の診断（草薙得一、1986）」では「水路雑

草」として「全国の池沼、河川敷、用水路等の低湿地にふつうに見られ（中略）、休耕田など3年以上不耕起にするとヨシの群落に変わる。（中略）休耕田への侵入は用水路、畦畔などの周辺に生えているヨシの地下茎の伸長による場合が多い。（後略）」で、「新版・日本原色雑草図鑑（沼田真・吉沢長人、1978）」では「・・川岸や水湿地に広く群生するが、水田にもはえる。」とある。水田の中では、しばしば畦畔沿いなどに発生する（図-5）ものの、今のところイネの栽培期間中に有効な除草剤はない。「地下茎から出る芽は太く硬く、ビニールや塩化ビニール製の畦畔板もつき破る。（原色雑草の診断）」が、農地のみでなく道路のアスファルトも突き破る（図-6）。ヨシが繁茂した休耕田を復田する場合には、東日本大震災での原発被災水田を対象にした「除染後水田のヨシ防除対策」が農研機構から公開されている（https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/reed_control_in_CRPs.pdf）。

この植物は人の都合でアシ・ヨシと使い分けられたが、フランスの哲学者ブレイズ・パスカルの格言「人間は考える葦である」では、今でも「ヨシ」ではなく「アシ」と読むのは、人間の性悪説を維持しているのであろうか。

田畑の草種 くまぐさ 藎・井（イ）

イグサ科イグサ属の多年草。全国に分布し、農耕地周辺の湿地、溜池や水田の畦、湿った空き地などに生育するが、乾燥にもよく耐える。草丈は環境によって異なり40cm程度から1mを超えるものもある。茎は根茎として匍匐し節間は短い。葉は退化してほとんどなく、茎の基部で小さな葉鞘となる。茎は円柱形で、茎の先に花序をつけるが、その先に茎と同じような苞を付けるため花序が茎の途中についているように見える。花序は短い柄の先に多数つき、花序は淡緑色で目立たないがよく見ると花被片は6個で先が尖り、ユリなどの花と似ている。

「イ」というのが標準和名で、日本で一番短い植物名であるが「イ」だけでは分かりにくいこともあり「イグサ」と呼ばれることが多い。因みに、一番長い和名は海藻のアマモの別名「りゅうぐう おとひめ もとゆい き 龍宮の乙姫の元結の切り外し」で21文字になる。

日本の伝統的床材である畳は、表面の畳表と芯になる畳床で構成され、畳表には普通イグサが用いられる。畳は縄文時代はその端があるとされ、当初はマコモやアシなどを平織した筵のようなものであったようである。「畳」は畳めるものの意であり、古くは古事記にも畳の記述がみられるが、現存する最古の畳としてその表にイグサが用いられたのは正倉院に残る「しよのたみ 御床畳」と呼ばれる畳で、今とほぼ同様の造りであった。この畳は、聖武天皇が使用していたとされる畳で、天皇は木製の台（御床）の上にこの畳を敷いてベッドとして利用していたようである。

その後、中世、近世、近代と現在のような形になり、一部の上流階級で使用されていただけであったものが、江戸時代中期

（公財）日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地 須藤 健一

以降には一般庶民にも畳が普及してきた。

イグサを畳表に用いるには、丈が1mほどで、また、途中で花序が付きそこで折れたり切れたりしやすいことから、栽培用品種として丈が1.5mほどもあり花が付きにくい「コヒゲ」が用いられている。

イグサは多くの変種や亜種に分類され、世界の温帯に広く分布している。ヨーロッパではビクトリア朝時代にイグサを使っていた記録がある。当時活躍していたシェイクスピアの戯曲「じゃじゃ馬ならし」の一場面に新婚の主人が花嫁を連れて帰宅する場面がある。その主人の言葉。「夕飯の準備はできているか、家は片付いているか、床にはイグサを撒いて蜘蛛の巣は払ってあるか」。床にイグサを撒くのはイギリスの古い習慣であったようで、女王、国王の謁見時や宮殿内の各部屋、民家の床にも撒かれていたそうである。今でいう赤絨毯の代わりであった。

